

### 13)細菌性髄膜炎(髄膜炎菌,肺炎球菌,インフルエンザ菌を原因として同定された場合を除く)

(定義) 種々の細菌感染による髄膜の感染症である。

令和6年の細菌性髄膜炎は、基幹定点医療機関から7人(累積定点当たり報告数0.58)の報告があり、令和5年(6人)より1人多かった(図2-13-1)。累積定点当たり報告数をみると本県(0.58)は全国(0.97)の約0.6倍であった(図2-13-2)。保健所別では、鹿児島市(4人)、加世田(2人)、川薩(1人)の報告があった(図2-13-3)。年齢別では、1~4歳(2人)、5~9歳・10~14歳・15~19歳・60~64歳・70歳以上(それぞれ1人)の報告であった(図2-13-4)。

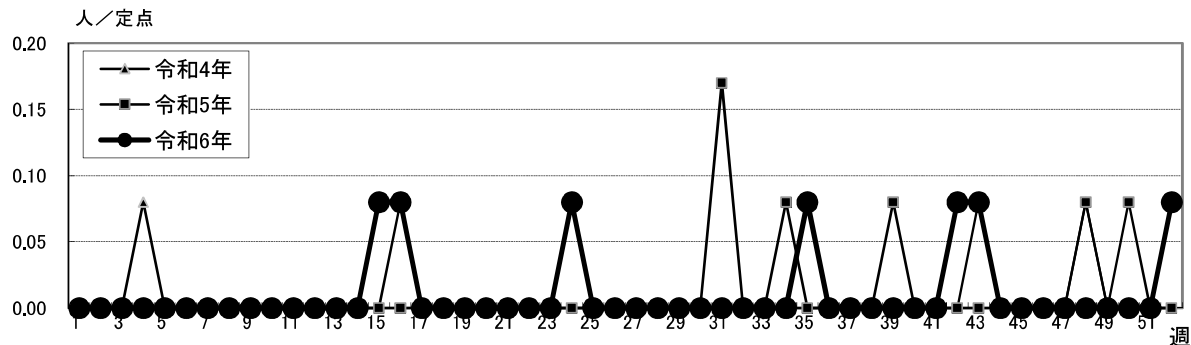


図2-13-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

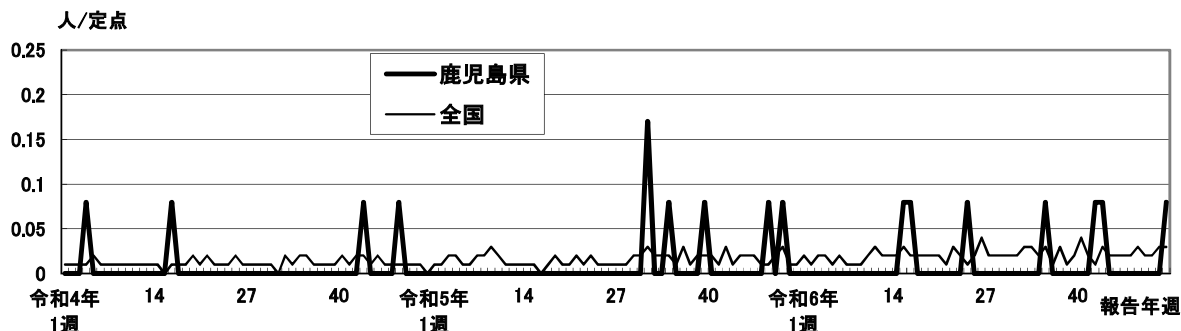


図2-13-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

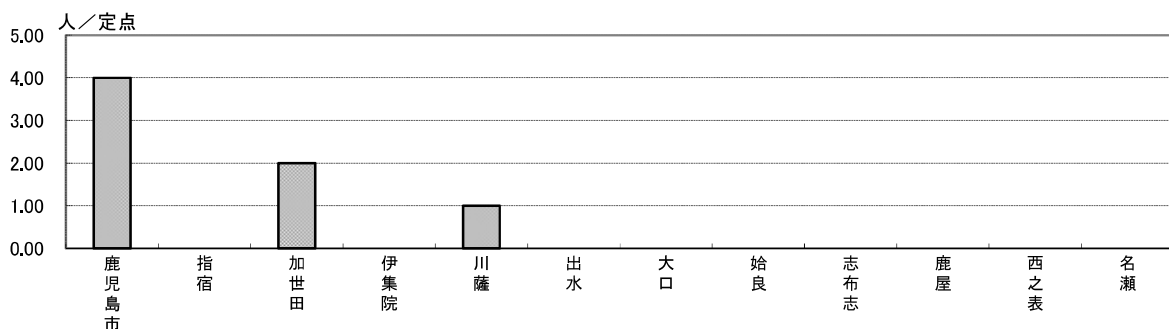


図2-13-3 定点当たり報告数(令和6年保健所別)

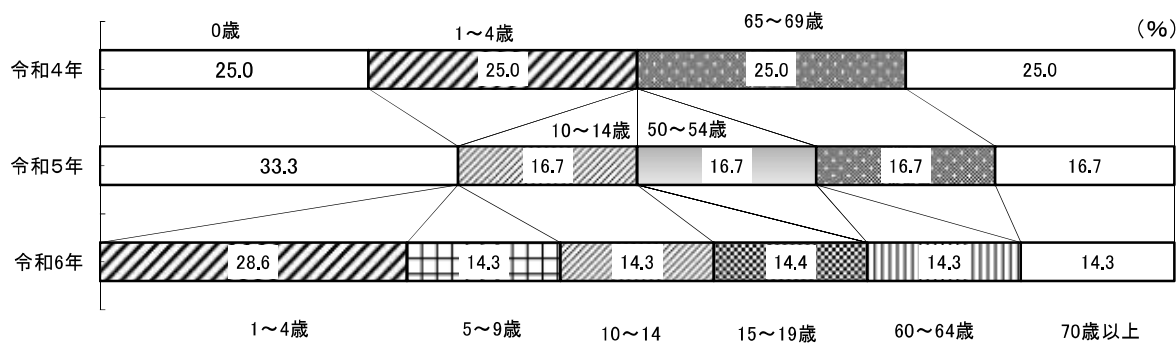


図2-13-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

## 14)無菌性髄膜炎

(定義) 種々のウイルスを中心とした病原体の感染による髄膜の感染症である。

令和6年の無菌性髄膜炎は、基幹定点医療機関から2人(累積定点当たり報告数0.17)の報告があり、令和5年(6人)より4人少なかった(図2-14-1)。累積定点当たり報告数をみると本県(0.17)は全国(1.67)の約0.1倍であった(図2-14-2)。保健所別では、指宿、鹿屋(それぞれ1人)からの報告であった(図2-14-3)。年齢別では0歳・5～9歳(それぞれ1人)の報告であった(図2-14-4)。

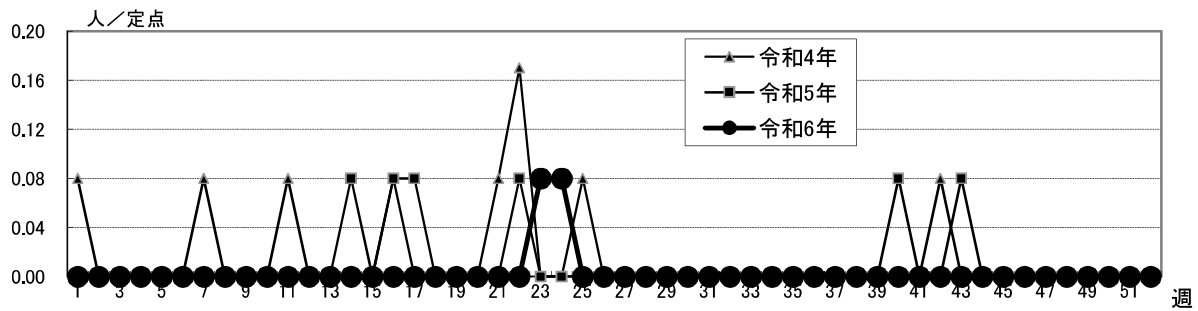


図2-14-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

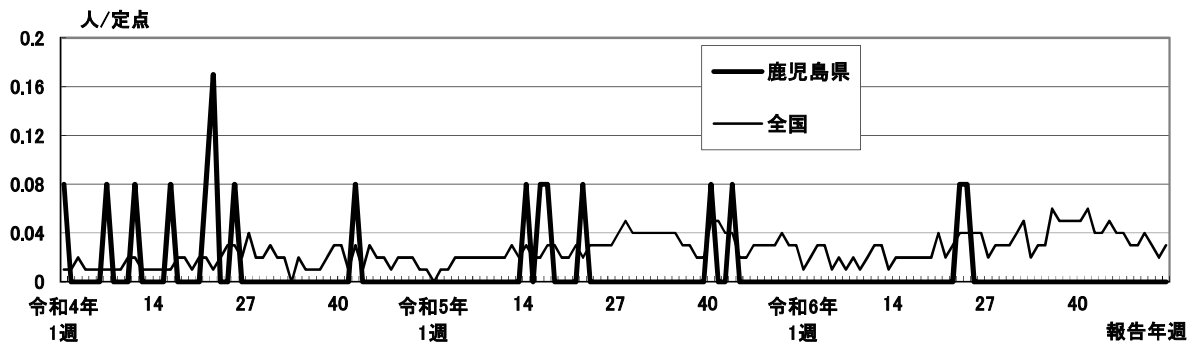


図2-14-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

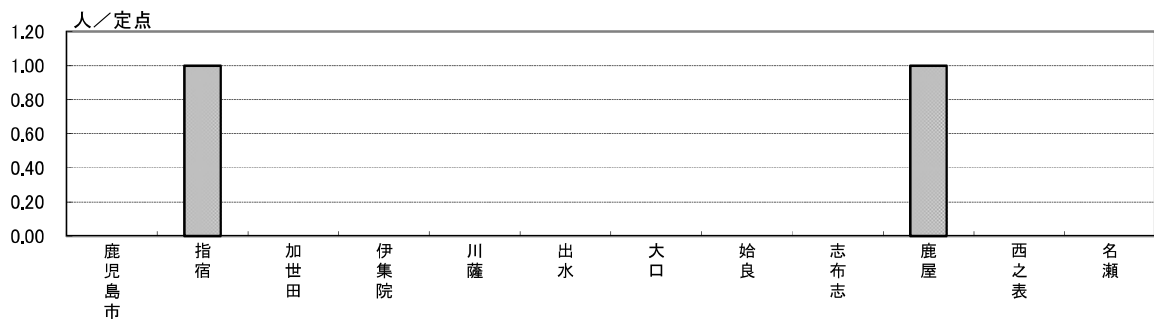


図2-14-3 定点当たり報告数(令和6年保健所別)

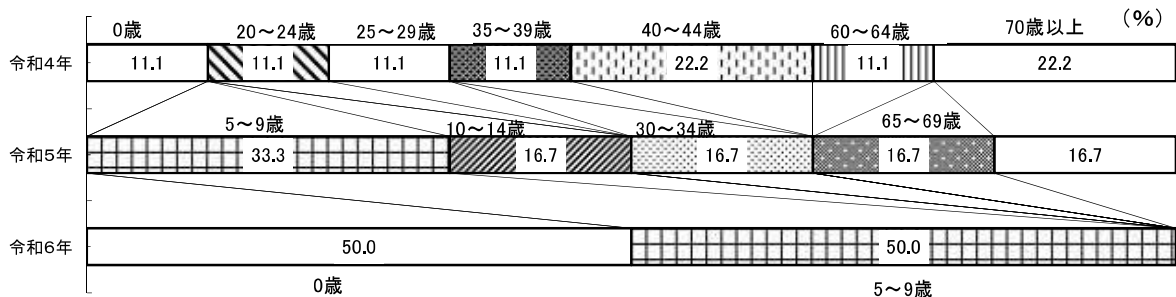


図2-14-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

# 15)マイコプラズマ肺炎

(定義) *Mycoplasma pneumoniae* の感染によって発症する肺炎である。

令和6年のマイコプラズマ肺炎は、基幹定点医療機関から457人(累積定点当たり報告数38.08)の報告があり、令和5年(0人)より457人多かった(図2-15-1)。年間では第48週(2.83)をピークに高めの流行が見られた。累積定点当たり報告数を見ると本県(38.08)は全国(46.83)の約0.8倍であった(図2-15-2)。保健所別では、加世田、指宿、鹿児島市の順に(図2-15-3)、年齢別では、5~9歳(45.1%)、10~14歳(28.7%)、1~4歳(14.7%)の順に多かった(図2-15-4)。

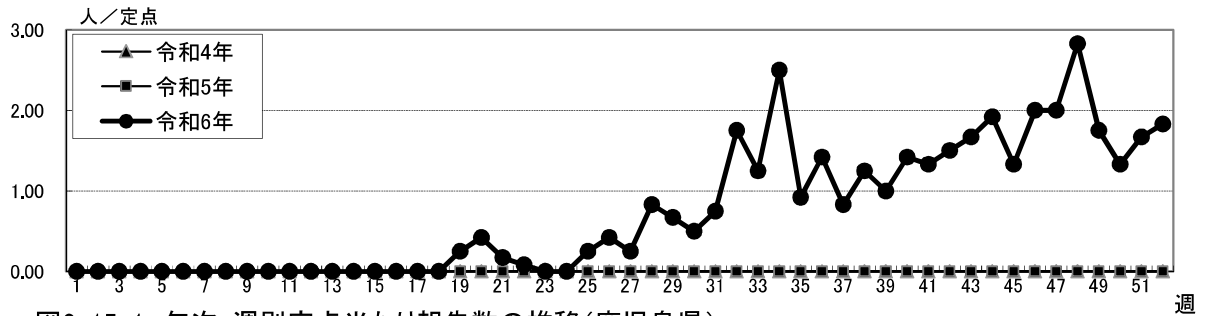


図2-15-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

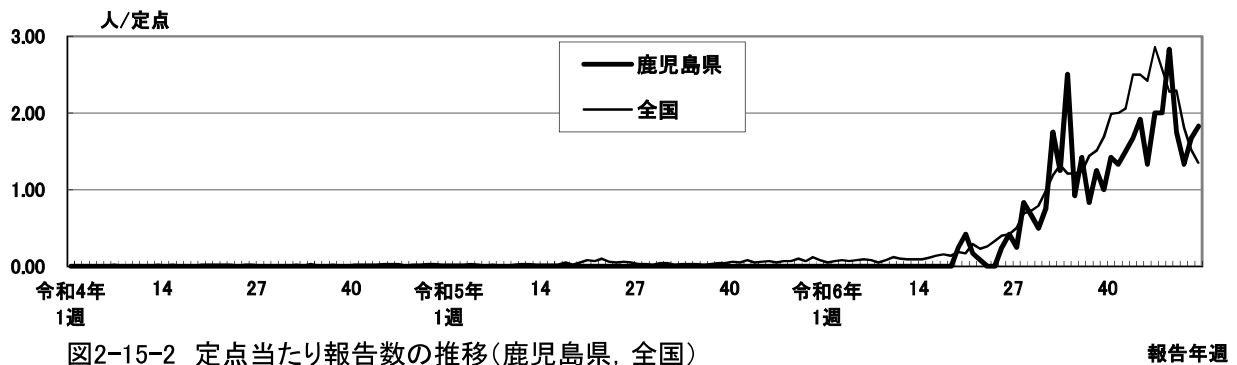


図2-15-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

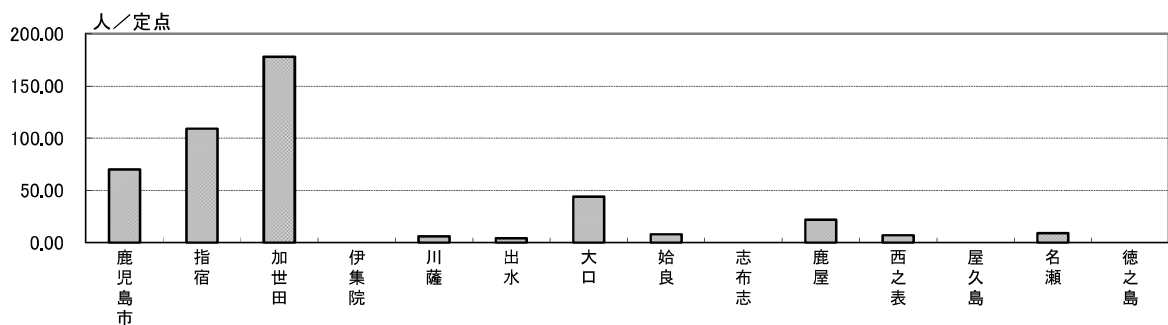


図2-15-3 定点当たり報告数(令和6年保健所別)

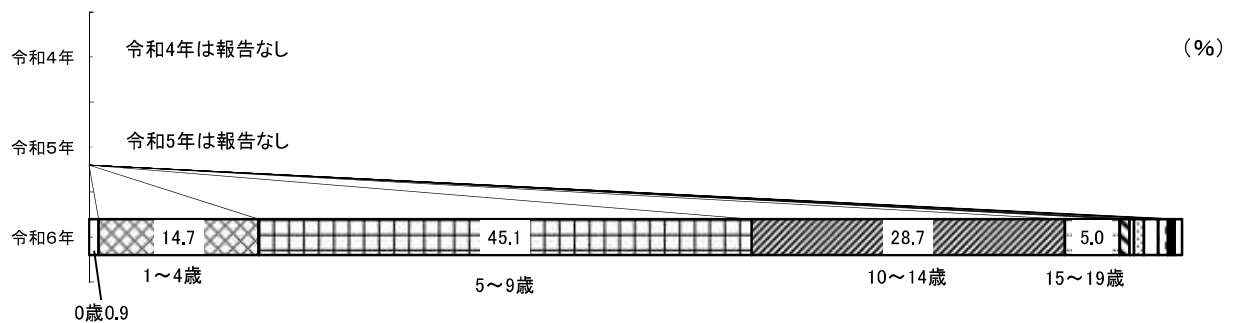


図2-15-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

## 16)クラミジア肺炎(オウム病を除く)

(定義) *Chlamydomphila(Chlamydia) pneumoniae, Chlamydia trachomatis*の感染による肺炎である。

令和6年のクラミジア肺炎(オウム病を除く)は、基幹定点医療機関からの報告はなかった(図2-16-1)。令和5年に1人の報告があり、令和4年は報告がなかった(図2-16-2, 図2-16-4)。

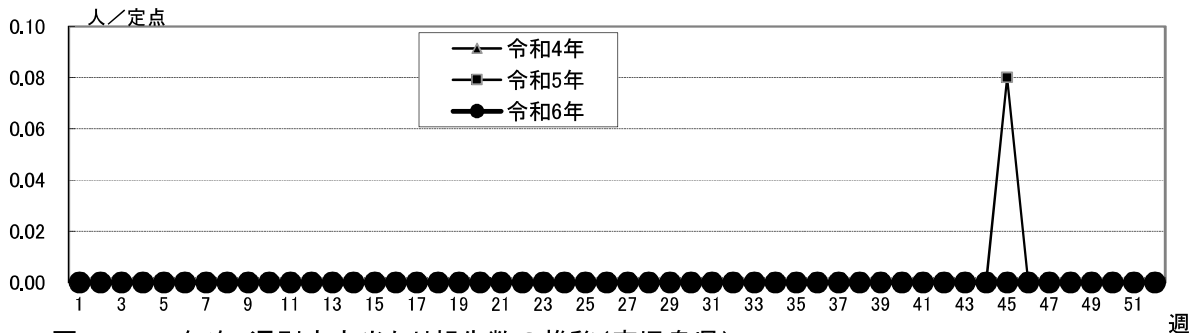


図2-16-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

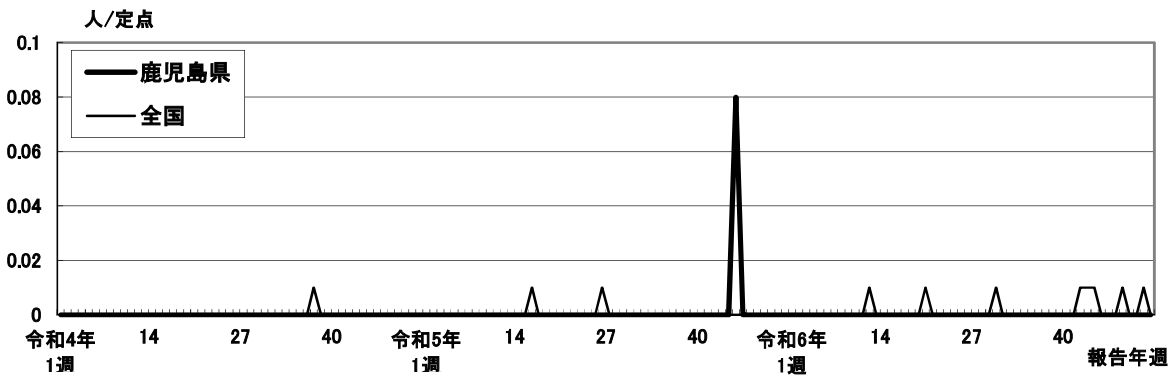


図2-16-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

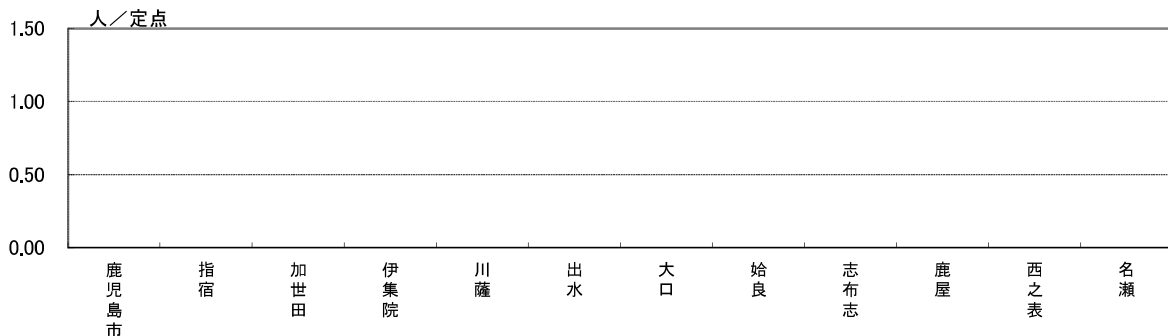


図2-16-3 定点当たり報告数(令和6年保健所別)

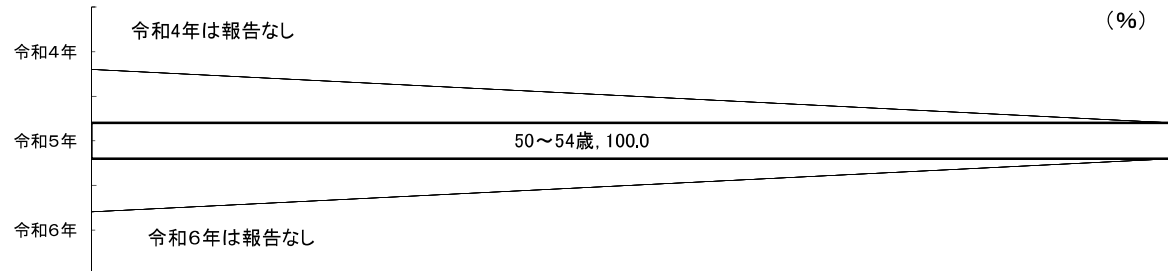
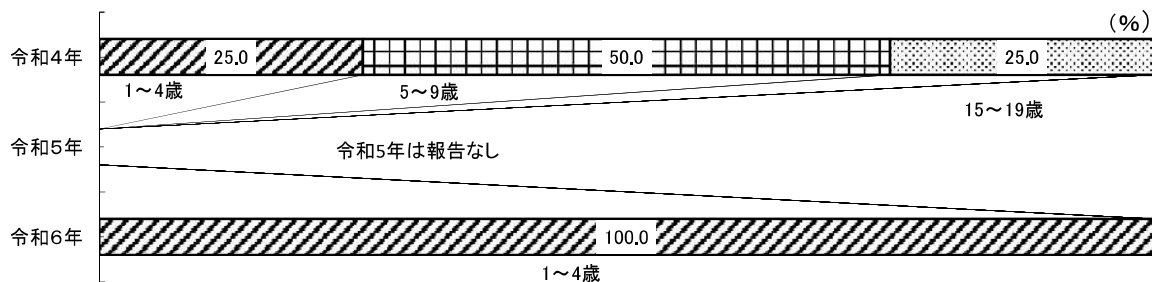
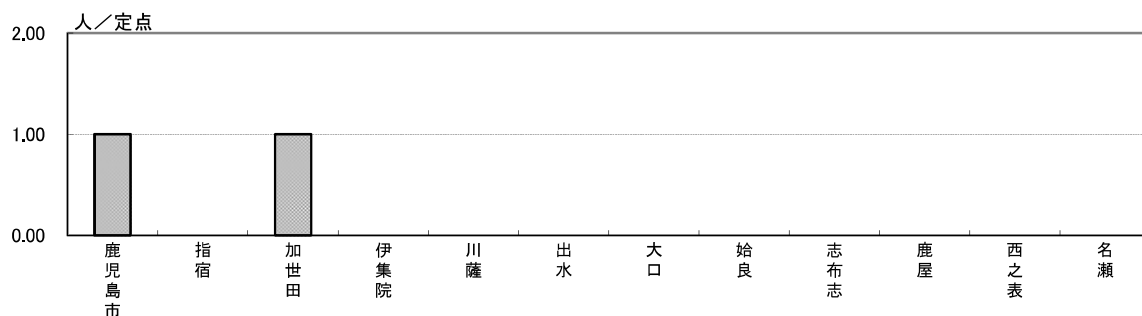
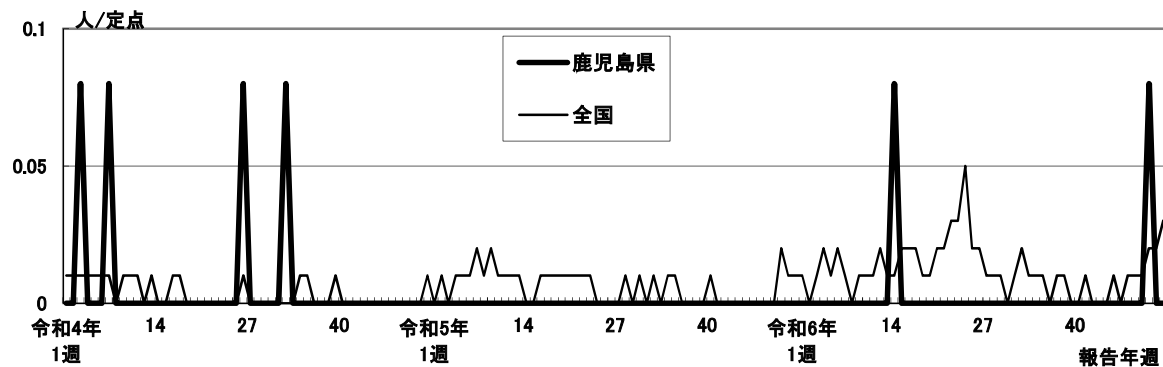
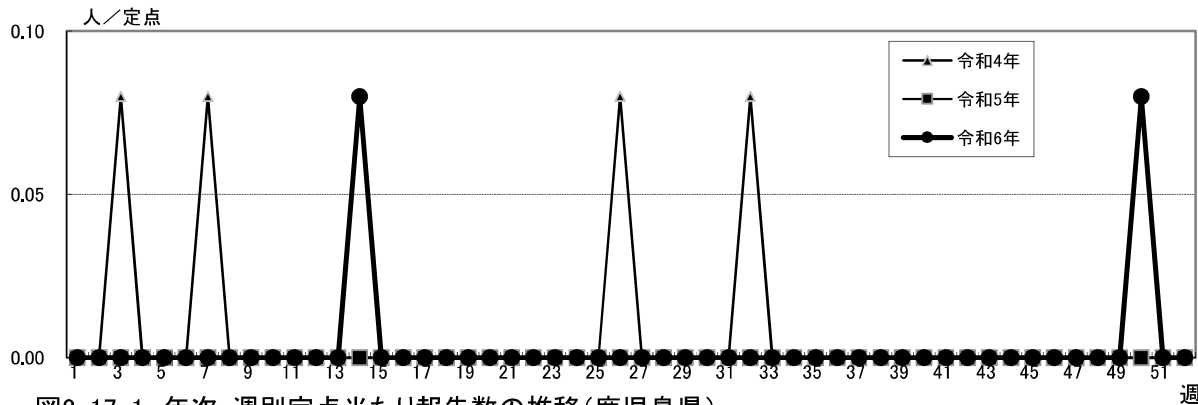


図2-16-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

## 17) 感染性胃腸炎(病原体がロタウイルスであるものに限る)

(定義) ロタウイルスの感染による下痢, 嘔吐, 発熱を主症状とする感染症である。

令和6年の感染性胃腸炎(病原体がロタウイルスであるものに限る)は, 基幹定点医療機関から2人(累積定点当たり報告数0.17)の報告があった。令和4年に4人の報告があり, 令和5年の報告はなかった(図2-17-1, 図2-17-2)。保健所別では, 鹿児島市, 加世田(それぞれ1人)からの報告で(図2-17-3), 年齢別では, 1~4歳(2人)の報告であった(図2-17-4)。



## 18)メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

(定義)メチシリンなどのペニシリン剤をはじめとして、β-ラクタム剤、アミノ配糖体剤、マクロライド剤などの多くの薬剤に対し、多剤耐性を示す黄色ブドウ球菌による感染症である。

令和6年のメチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症は、基幹定点医療機関から152人(累積定点当たり報告数12.67)の報告があり、令和5年(134人)より18人多かった。月別報告数では、2月(17人)が最も多かった(図2-18-1)。累積定点当たり報告数をみると本県(12.67)は全国(32.80)の約0.4倍であった(図2-18-2)。保健所別では、川薩(45.00)が最も多く、次いで鹿児島市(42.00)、出水(24.00)の順で多かった(図2-18-3)。年齢別では、70歳以上の割合が約76.3%を占めていた(図2-18-4)。

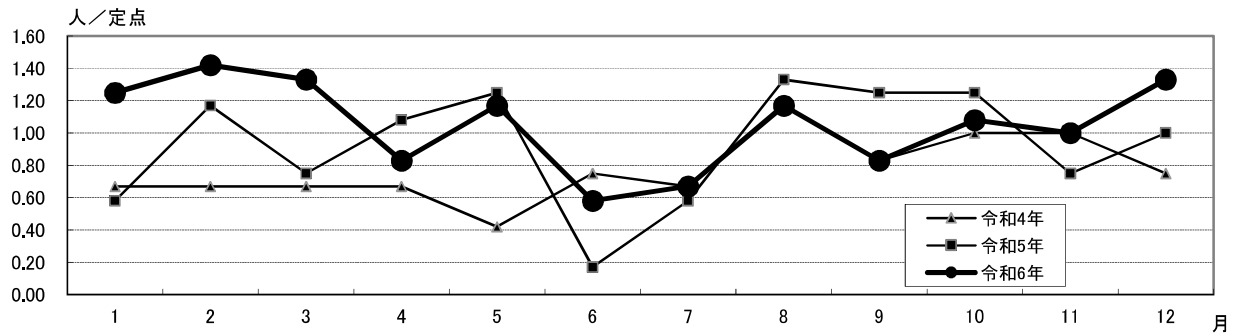


図2-18-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

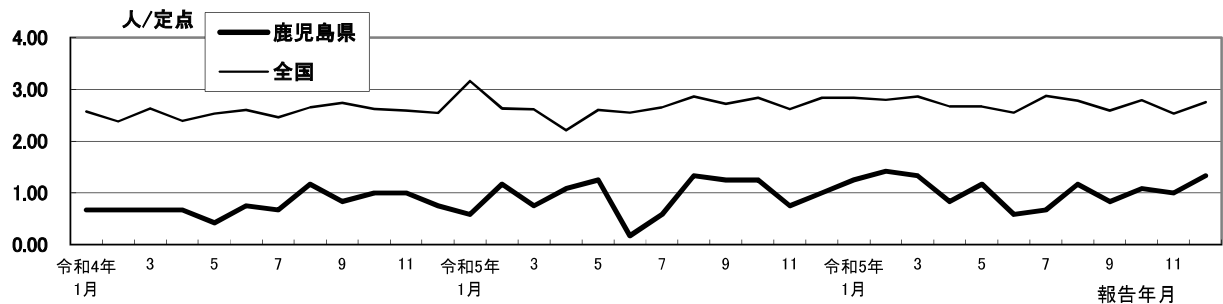


図2-18-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

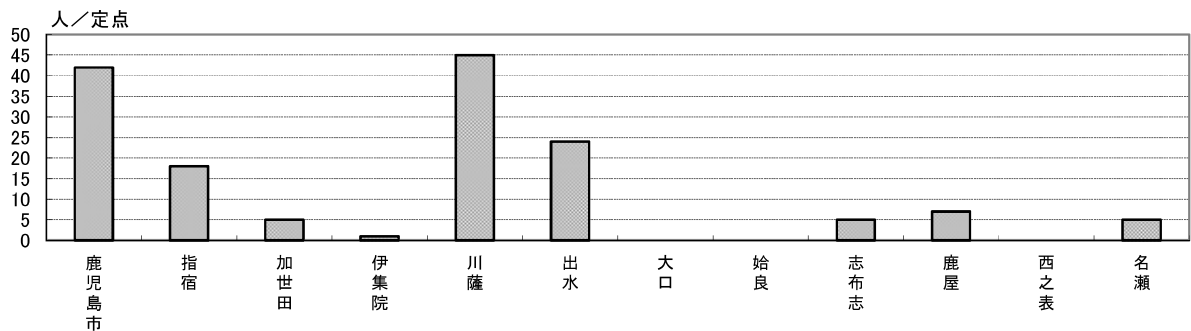


図2-18-3 定点当たり報告数(令和6年保健所別)

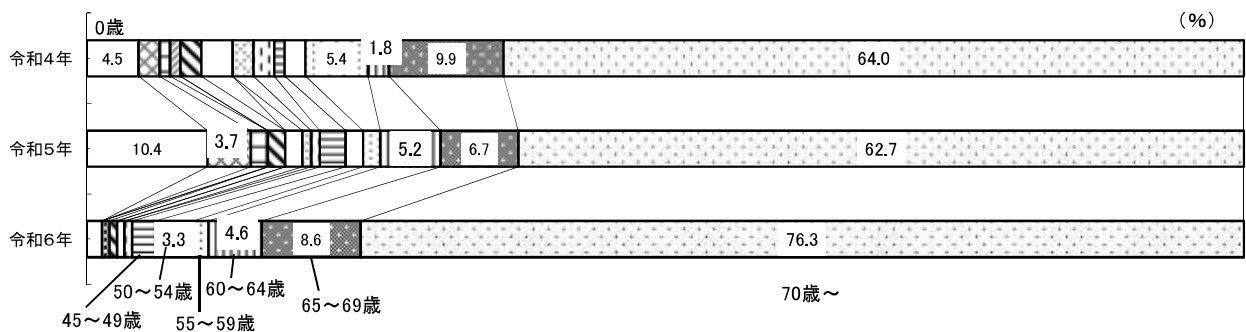


図2-18-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)



## 20)薬剤耐性緑膿菌感染症

(定義) 広域β-ラクタム剤, アミノ配糖体, フルオロキノロンの3系統の薬剤に対して, 耐性を示す緑膿菌による感染症である。

令和6年の薬剤耐性緑膿菌感染症は, 基幹定点医療機関から3人(累積定点当たり報告数0.25)の報告があり, 令和5年(1人)より2人多かった(図2-20-1, 図2-20-3)。累積定点当たり報告数をみると本県(0.25)は全国(0.17)の約1.5倍であった。(図2-20-2)。保健所別では, 川薩(2人), 鹿児島市(1人)の報告があった(図2-20-3)。年齢別では70歳以上(2人), 50~54歳(1人)の報告であった(図2-20-4)。

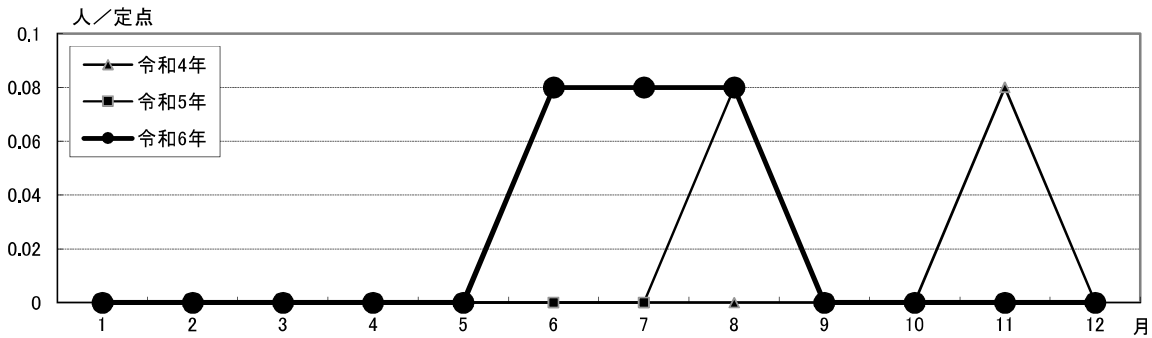


図2-20-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

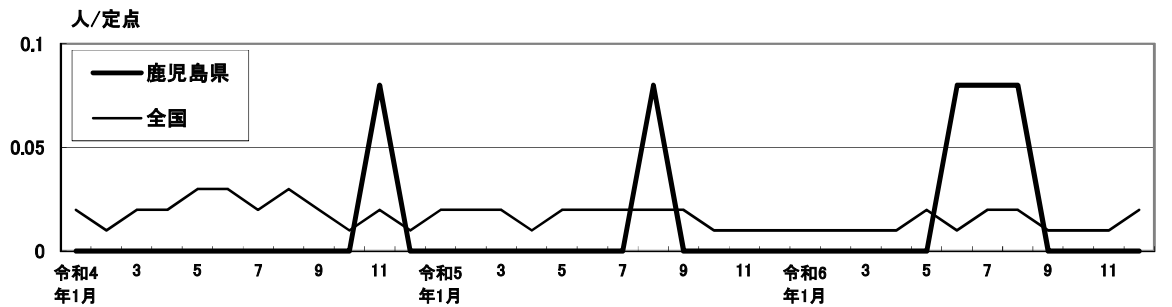


図2-20-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

報告年月

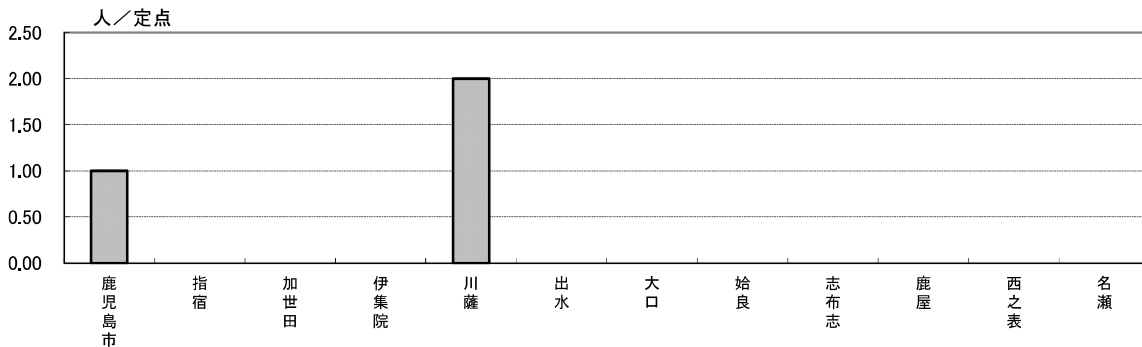


図2-20-3 定点当たり報告数(令和5年保健所別)

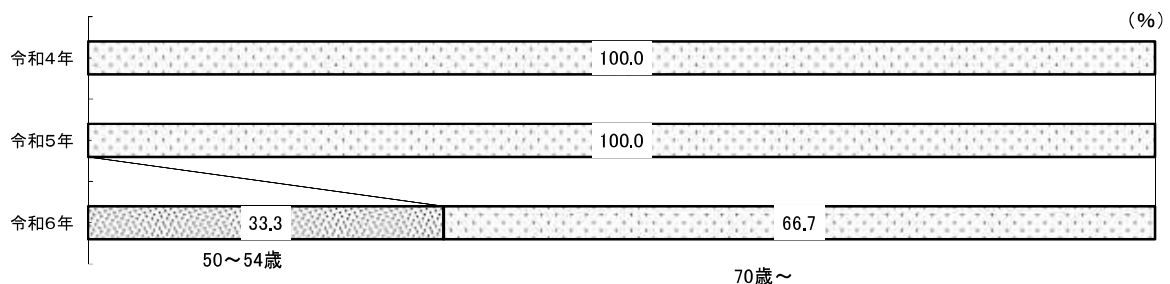


図2-20-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

---

## (2) 眼科定点把握対象疾患に関する動向

鹿児島県感染症発生動向調査委員会委員  
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科眼科学分野  
教授 寺崎 寛人

---

### 1) 急性出血性結膜炎

極めて限られた発症例が見られるが、流行を疑わせるものはない。

### 2) 流行性角結膜炎

令和6年度、鹿児島県内の眼科定点医療機関から報告された流行性角結膜炎は347人で、令和5年度(214人)から約1.6倍に増加した。累積定点当たり報告数は49.57で、全国平均(29.25)の約1.7倍と高水準であり、県内で流行がみられた。

地域別では、川薩地区(205.00)が突出して多く、次いで始良(81.00)、鹿児島市(14.00)の順であり地域性が見られた。

年齢別では30～39歳(21.6%)が最多で、40～49歳(16.7%)、20～29歳(13.5%)が続き、成人層中心の感染が特徴であった。

発生は春から夏に増加し、秋に減少する季節性を示したが、これは本疾患の特徴を反映していると考えられる。鹿児島県では全国よりピークが高く、流行期間も長かった。高温多湿な気候や感染予防意識の地域差が影響した可能性がある。

## 21)急性出血性結膜炎

(定義) エンテロウイルス70型及びコクサッキーウイルスA24変異型の感染によって起こる急性結膜炎である。

令和6年の急性出血性結膜炎は、県内の眼科定点医療機関から1人の報告があった。令和5年は2人の報告であった。全国においても大きな流行は認められなかった(図2-21-2)。

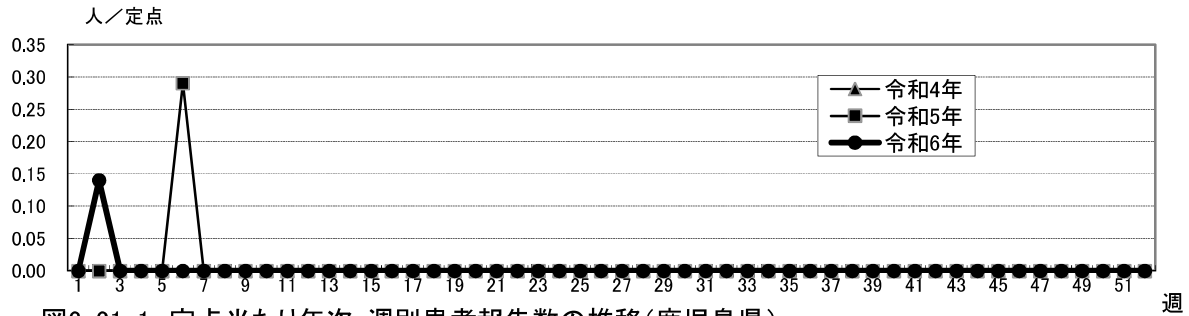


図2-21-1 定点当たり年次・週別患者報告数の推移(鹿児島県)

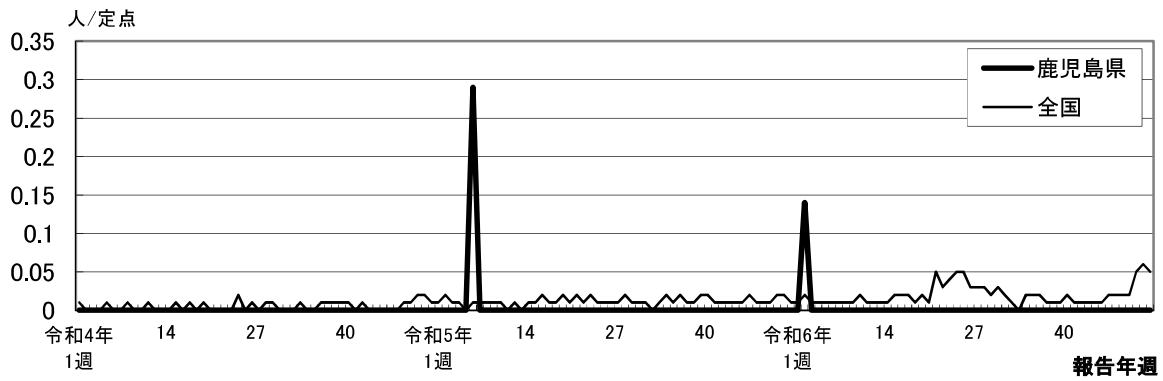


図2-21-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

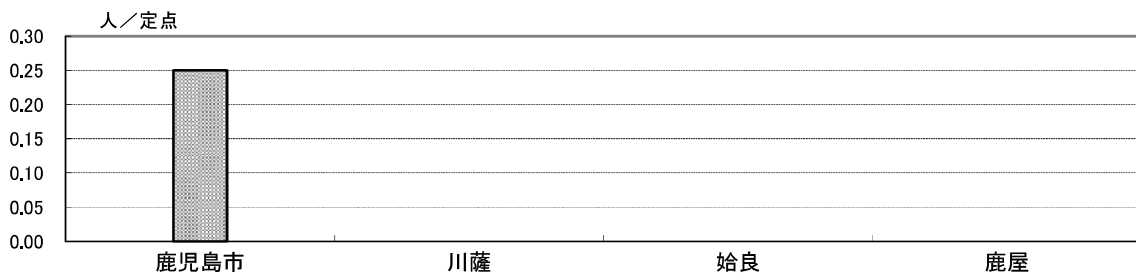


図2-21-3 定点当たり報告数(令和6年保健所別)

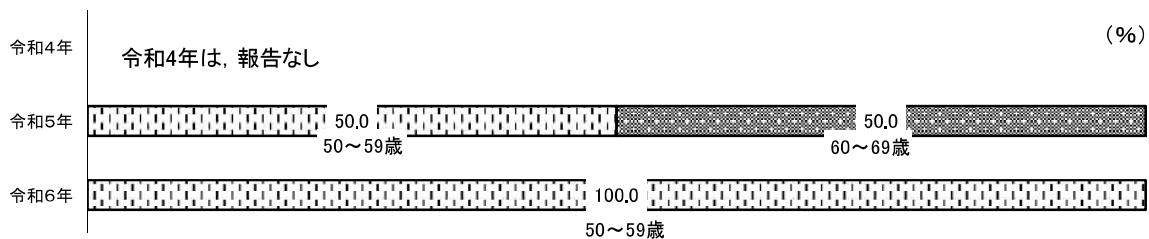


図2-21-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

## 22)流行性角結膜炎

(定義) アデノウイルス8, 19, 37, 4型などによる眼感染症である。

令和6年の流行性角結膜炎は、眼科定点医療機関から347人(累積定点当たり報告数49.57)の報告があり、令和5年(214人)より133人多かった(図2-22-1)。累積定点当たり報告数を見ると本県(49.57)は全国(29.25)の約1.7倍であった(図2-22-2)。保健所別の定点当たり報告数は、川薩(205.00)、始良(81.00)、鹿児島市(14.00)の順に多く(図2-22-3)、年齢別では、30～39歳(21.6%)、40～49歳(16.7%)、20～29歳(13.5%)の順に報告が多かった(図2-22-4)。

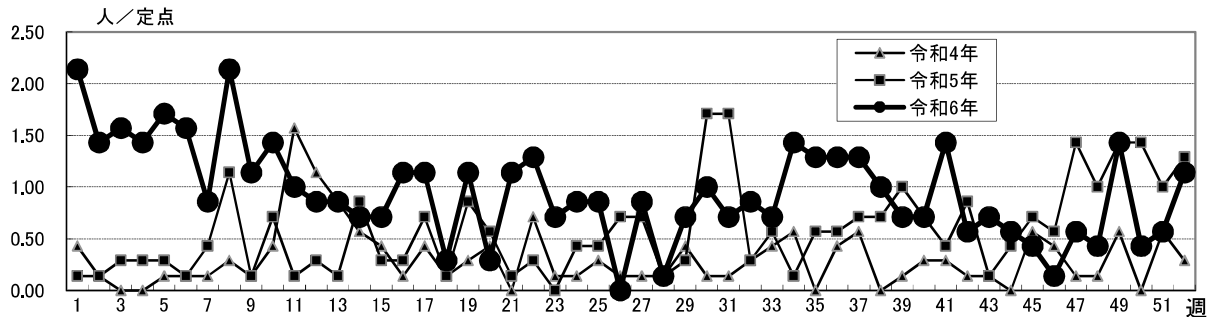


図2-22-1 定点当たり年次・週別患者報告数の推移(鹿児島県)

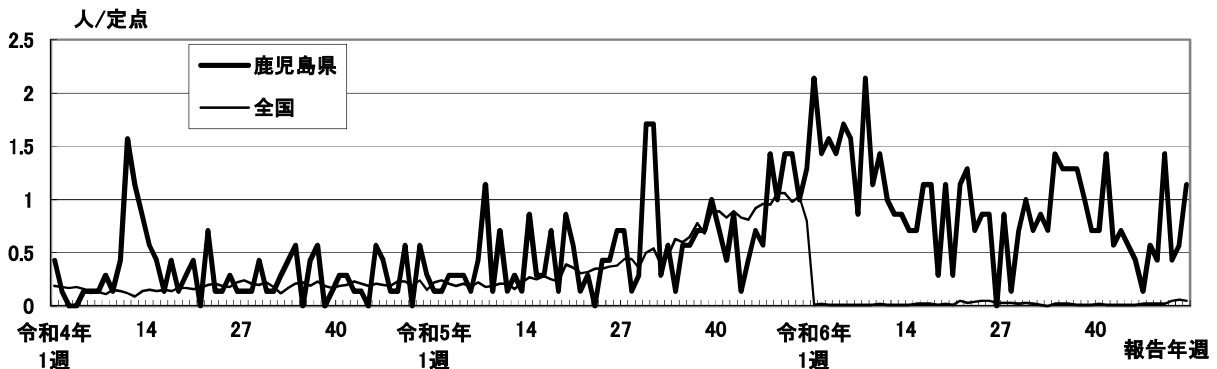


図2-22-2 定点当たり患者報告数の推移(鹿児島県, 全国)

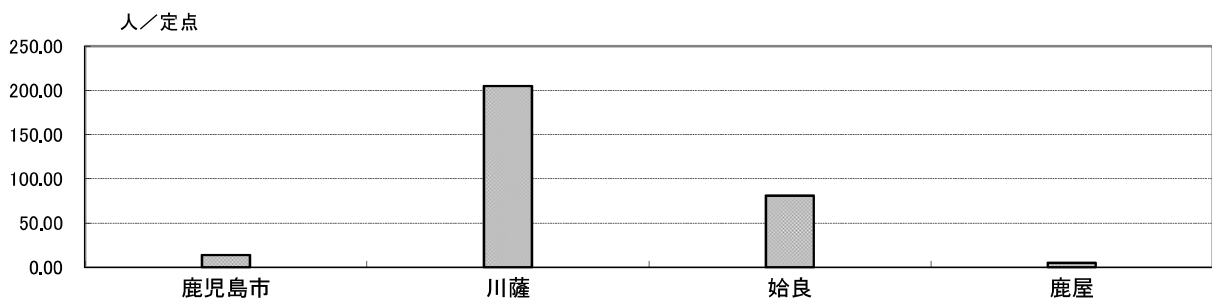


図2-22-3 定点当たり報告数(令和6年保健所別)

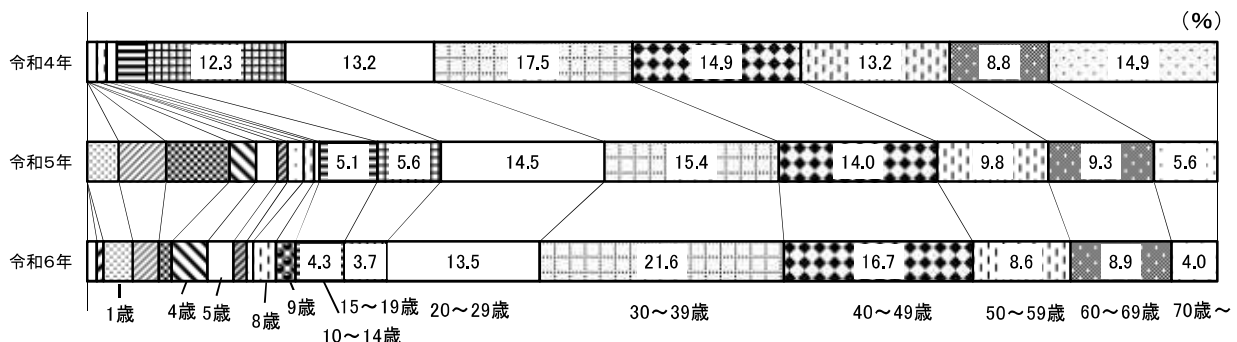


図2-22-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)